

武田泰淳研究

——「改造評論」発表の翻訳「手」について（上）——

A Study of TAKEDA Taijun

長 田 真 紀

Osada Maki

要 旨

上海で刊行された「改造評論」に掲載された武田泰淳の翻訳「手」（原作艾蕪）についての紹介と解説。

【キーワード】「武田泰淳」「艾蕪」「中国文学」「改造評論」

武田泰淳は、昭和十九年六月、二度めの微用を逃れる意味もあって上海に渡り、中日文化協会に就職した。

武田にとって、日中戦争に兵士として中支に出征した昭和十二年十月から昭和十四年十月までの二年間を、武田の第一回目の中国体験とするならば、敗戦を上海で迎え、昭和二十一年四月に引揚げ船で帰国するまでの一年十ヶ月は、武田の第二回目の中国体験となる。

中日文化協会の理事で、既に上海に渡っていた林広吉の紹介により、武田は同協会附属の東方文化編訳館に勤務した。武田より先には石上玄一郎が、後からは堀田善衛が上海に渡り、ともに仕事をしている。数年後には戦後派作家の旗手となる三人の上海で繰り広げられた交際は、武田の代表作『愛』のかたち（昭和二十三年十二月「序曲」）に結実していくことになる。

武田は、滬西（上海西部地区）にあった小竹文夫（中国近代経済学者・東亜同文書院教授）の家庭に寄宿し、フランス租界にあった東方文化編訳館に通い、日本語書籍の中国語訳に従事した。

八月十五日、日本の敗戦が決定するとガーデンブリッジの向こう側の日本租界が日僑集中地区となり、日本人は監視下におかれる。武田はそこで中国語の書けない在留邦人のかわりに書類を作り中国側の役所に提出する仕事、いわゆる代書屋をしている。

在上海時代の武田の文学者としての業績は、現在わかっているも

のとして以下のものがあげられる。

昭和十九年八月 「上海化」(八月十日号の「大陸新報」に発表)

九月 「周作人と日本文芸」(方紀生編『周作人先生

のこと』光風館に収録。ただしこれは、前年

十八年九月の雑誌「国際文化」に発表した「中国人と日本文芸」と同内容)

十一月 「朱舜水の庭」(「批評」Iに発表)

十二月 「跋」(竹内好著『魯迅』日本評論社)

昭和二十年一月 「中国の武士道」(一月二十五日号の「大陸新報」に発表)

帰国後は、

昭和二十一年五月 「目を惹く 延安 —急進的出版社の進出—」

(「日本読書新聞」五月二十二日号)

六月 「司馬遷の精神 —記録について—」(新時代)

「老舍の近作について」(「中国文学」九十六号)

「中国の作家たち」(「人間」)

と、続いていく。

敗戦下の上海では、混乱のなか到底執筆できるような状況ではなかったことが窺われる。

さて、このたび、日本敗戦後の上海で刊行されていた新聞や雑誌をいくつか読んでいたところ、武田泰淳が「武田淳」の筆名で翻訳を発表していることが判明した。

それは、艾蕪原作の「手」を、改造日報館刊行の月刊誌「改造評論」創刊号に発表したものである。奥付けによると刊行は「中華民

國三十五年 六月一日」、つまり一九四六年(昭和二十一年)六月一日である。武田が引揚げ船で帰国後に上海で刊行されたものだが、翻訳の仕事そのものは、敗戦直後の上海でしたものと考えられる。

これは、『増補 武田泰淳全集』未収録であり、武田年譜の定本ともいべき古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」(「増補 武田泰淳全集」の別巻『増補 武田泰淳研究』(昭和五十五年三月 筑摩書房)に収録)にもその存在についての記載はない。

本稿ではこの「手」について紹介し、武田文学誌——とりわけ上海時代——の空白を埋めたい。

まずは全文を掲げる。なお、仮名遣い、旧漢字の表記等は原文のままとした。句読点の不備や誤植についてもあくまで原文にしたがい、敢えてそのままとした。

手

艾 蕪

辛亥革命後まもなく、祖父は分家して古屋敷へ移った。そこには當時、曾祖母が住んでゐた。そして今まで私たちの住んでゐた、曹家の水車に近い屋敷は祖父の次の弟に譲った。彼と私の祖父は腹ちがひの兄弟で、私たちは二番目のおぢいさんと呼んでゐた。彼のめとつた妻を、私たちは二番目のおばあさんと呼び、私の母の生家の人であつた。互ひに曾祖父が同じなので母親は生家では彼女を『おかあさん』と呼び、私の家では『を

ばさん』と呼んでゐた。私の母が私の家へ嫁入りしたのも、この二番目のおばあさんがあづかつて力あつたといふわけである。したがつて、私の祖父は五人兄弟だが、一番私がなれ親しんだのは、二番目のおぢいさんの家の人々だつたと言つてよい。私は母と一緒にひまさへ有れば遊びに行つた。私たちが引越して行つた古屋敷は、私たちのもと住んでゐた所と、ほんの二三町で、その間の小河は二本とも、しつかりした石橋がかけられ、互ひの行き來は實に便利だつたからである。

二番目のおぢいさんの長男のお嫁さんは、韓といふ姓で、私たちは彼女を五番目のをばさんと呼んでゐた。彼女は文人の家庭のお嬢さんで、學問もあり、私の母とはひどく仲が良く、私の家に遊びに来るのが楽しみで、よく打ちあけた話を母にしてゐた。たとへば夫の母親に對する不満など、私の母には遠慮なく打ちあけた。卵型の顔が象牙のやうに澄んだ色をしてゐた。普通の女よりずぬけて鼻すちが通り、黒々とした眼は光る程ハッキリしてゐた。一寸見るとやはらかに缺けてゐるやうだが、別段きつすぎる所もない。私は彼女が聲荒だてて人と喧嘩したのもきかないし、眼に角たてて子供を叱りつけることもなかつた。つきあつて見ると、實に人情みもあり愉快なひとだと、誰でもすぐわかつた。いつも清潔なキチンとした服裝で、髪も綺麗に手入れしてゐて、手など伸ばすと眞白で、百姓の女房のやうでなかつた。全く奥様のやうだつた。また事實、二番目のおぢいさんの家は百姓暮しではあるが息子は手だすけ程度の立場で、ごく軽い仕事をやるだけだつた。牛に牽かせた鋤をあや

つるやうな力仕事には、みんな小作人が頼んであつた。だから自然、嫁さんも田へ出て日に焼ける必要がなかつた。せいぜい家に居て洗濯や炊事、豚に餌をやるくらいのこと、一日の間には何とかひまも出來、自分の身づくりひに氣をつけ、恥づかしい形もととのへることが出來た。

ある日、二番目のおぢいさん一家が、街へ出たり、人を訪ねたりして、このお嫁さん一人を留守居に残しておいた。これも他の地方、つまり村人が一族みんな、何十軒何百軒と一緒に住んでゐる所なら、何も問題はない。ところがこの成都平原では人々はバラバラに住んでゐて、ひどく淋しい状態である。彼女の家で働いてゐる長年（一年契約の小作人のことである）が丁度この日、仕事からもどつて一服やる時、この嫁さんが豚小屋のそばで豚に餌をやつてゐるのを見つけた。そこでそばへ行つて煙草をふかしながらむだ話をはじめた。

豚がよく育つ、いくらぐらいに賣れるだらうなどつまらぬ話をするうちに、彼は急に同情した聲音で『つかれなさつたらう。わしが餌をやりますよ』と言つた。

嫁さんはたしかに疲れてゐた。誰かやつてくれないかと思つてゐたところだから、餌をやる瓢箪をすぐ彼にわたした。わたし時おそらく感謝の微笑でもうかべてゐたのだらう、彼は瓢箪をうけとらずに、瓢箪を持った白いふつくらしした手をなぞてしまつた。嫁さんはたちまち顔を赤くし、瓢箪を投げ棄てるといきなり彼の横面をなぐりつけ、鶏を追ふ時使ふ音のする刷毛で屋敷の外へ追ひ出した、晝過ぎて家の者が歸ると、嫁さんはこ

の不愉快な事件を訴へた。そしてその晩、その小作人は家へ寢に歸らなかつた。

この小作人は遠方の者ではない、私の曾祖母の家のツイ側に住んでゐた。姓は楊、名は冬生といふ二十七八の若者である。見たところ間のぬけた風もなく、仕事に精出し、よく動きまはり、主人には充分好かれる男だつた。おそらく數代前は、彼の家は貧乏ではなく、屋敷の垣根は早くから崩れ、いら草生えしげる中にも残された痕跡からして、私達の屋根より小さくは思へなかつた。正面は瓦もなく、壁板もなく、木組のみ残つて、剥げ落ちた紅い漆を身につけ、何物ともかかはりなく、ひとりみぢめに草地に立つてゐた。かつて祖先のしつらへた家屋はすべてくだけこはれ、古材木でこしらへた小さな家だけが、食を求めて故郷を離れるのをさらふ子孫のために、しばし雨風をしぐの巢となつてゐた。彼等はこの廢墟の上で、やはりバラバラに住む様式をとり、小さな建物は何れもつながりなく、互ひに菜園でへだてられてゐた。それは澤山の大きな屋敷が田畠でへだてられてゐるのに似てゐた。楊冬生の父親を、人々は楊老臘と呼んだ。家ごしらへのうまい彼は、自分の小屋を他人の小屋とちがつたものにし、小屋のまはりを竹籬でかこみ、手の平大の空地にも小さな樹木を植えた。家の前後も綺麗にととのへ、貧乏人の勤勉さを示してゐた。楊老臘は五十になつても少しの衰へも見せず、瘦せた顔はいかにも頑健さうだつた。眉毛も鬚もごく黒く、鼻の穴の中までこわい眞黒な毛が出てゐた。ひどく嚴肅な顔つきで、いつも何か計畫してゐるやうに見うけられ

た。家では畑仕事で暮し、時たま他人の一寸した仕事をひきうけた。不幸にして息子がこんな事をしでかしたと聴くと、彼は眞赤になつて怒り、もし母親が泣きすぎり、楊家の子孫を斷つて下さるかと哀願しなかつたら、息子を打ち殺したかもしれない程だつた。息子を打ちこらしめただけではすまぬと悟つた楊老臘は、妻をつれて私の二番目のおぢいさんのもとへ挨拶にかがひ、息子の愚鈍愚痴をゆるして下さるやう願ひ出た。

私の家の者は、この事件の起きた事をきくと、みんな驚いて首を振つたものだ。祖母など嘆息をした。

『人間てわからんもんだよなあ。楊冬生はわしら子供の頃から知つてゐるが、馬鹿げたことはやらかさぬ男だと皆言つてゐたのによう』

祖母はまだ若くて嫁入りしたその頃は、曾祖母と一緒に住んでゐた。子供がふえてからはじめて竈を分け、曹家の水車に近い屋敷に移つたのである。だから楊冬生が地面を爬つて鶏の糞をいぢつたり、壁づたひに舌たらずの叫びをあげて歩いてゐた頃から、辮髪をぶらさげ父親の後についてかけ廻つてゐたことまで、全部彼女は自分の眼で見て知つてゐた。

祖父は額に皺をよせて氣むづかしげに言つた。

『本を讀まぬからかういふ事になる。……三代書を讀まざれば牛と變ずる、と言ふが、全くそのとおりだ』

祖父は小作人に田を作らせる一方（叔父たちは手助けの立場に在つた）、塾を開いて授業をしてゐた。『万事みな下品にして、ただ讀書のみ高しといふ昔風な見解の持主だつた。祖母は祖父

のその言葉を聴きをはると、しばらく沈黙してから反対意見をのべた。

『どうとかぎつた事でもないだらうが。わたしだつて百姓は澤山知つてゐるさ、みんな本も讀んだことはない。だけどあんただつて、あの人たちを馬鹿と言へるか知れないが悪者だとは言へますまいよ。かへつて打つ飲む買ふの連中は、金持の家の少しは本を讀んだのに多いんだから』

祖父は顔つきも聲音もキツとあらたまつた。

『お前は一を知つて二を知らんのだ物持の子弟が本當に讀書してゐると想ふか。いいかい正規に讀書したことのない者でも本氣で讀めば『禮に非れば言ふなし禮に非れば親しむなし』もわかるし『男女の授受はみづからせず』だつてわかるんだ。女の手をなぜたりなんかするものか』

祖母は本も讀み、長恨歌の句もみんなそらで言へた。一番目の弟は秀才だし、次の弟は舉人だつたから、讀書人のことなどいつとなく聴きおぼえてゐた。だから彼女は再び祖父の話を反駁しながらも、言葉もおだやかで、あんたが信じないならそれまでといふ調子だつた。

「螢の光、窓の雪、十年勉強して鐵の硯もすりへらした人もゐるわさ。さういふ賢人の話は耳にたこの入るほどきいてゐるさ。ところがいつたん國家の試験にパスして大官となると、マアわたしの弟にきいてみなさい！……話すのもいや、口が汚れるわ」

祖母は物しづかに語り、首都北京へ行つたことのある人の話

を引用したので、祖父もだまつてしまひ、フト嘆息まぢりになつた。

「役人仲間に入ると、すぐ駄目になるのかな。……だから謹慎しなけりやいかんのだ。……不義にして富みかつ貴きは、我に於て浮雲のごとしだ。聖人がチャンと見ぬいてゐられた通りだ」

曾祖母には別に意見があつた。晩年は長い精進生活で、一日と十五日は觀音菩薩の面前で經を讀み、同じ精進の婆さんたちと遠い所へかけて峨嵋山を拜んだりした。だから彼女は『あの男の祖先が何か徳にそむいたことをしたんだらうよ。子孫がこんな面汚しをしてかすなんて』といふ意見だつた。

『サアそりやどうだらうかな。全くの話、あそこは代々まじめな百姓だものな』

祖父は曾父母の意見に同意しなかつたが、話しぶりは多少やはらひでゐた。曾祖母は數珠をひとしきりつまぐつてから、フンと笑つた。

『徳に背いた事をした者が一々ひとに言ふもんかよ。世の中にそんなあほうは居やせんわ。あそこの家ぢや、ひとの鶏が自分の家の菜をつまんだ時、鶏の足をぶち折らなかつたかね。屋根が漏つて布團がぬれた時、天とう様に悪口は言はなかつたかね。蟻が路を爬つてゐる時、踏み殺しはしなかつたかい。ええええ、話せばいくらでもある。神さまだけがチャンと御存知さ。神様は一年中わしらの後をつけまはして、一つ残らず帳面につけてござる。悪事をしてわが身にむくひはなくとも、やがて子孫の

身にめぐつて来るわさ』

祖母は嘆息をした。

『それぢや人間も大變だねえ。蟻の一匹ぐらい誰だつて踏み殺してゐませうが。年とつた者なんか、眼がちらついて地面に落した針もよう見つけやせんのに。蟻なんか目に入りやせんがなあ』

『二匹ぐらい踏み殺してもかまはんとしてもさ、人間にあやまちはつきものだよ、精進念佛してさへりや佛様には眼がおありだ、かならずお恵み下さるのさ』

祖父は答へずに、そんな馬鹿なといふ微笑をうかべた。

まもなく五番目のをぢさんがやつて來た。彼の様子は多少百姓くさいが、百姓のやうにボンヤリしてゐない。商人くさくもあるが、それ程狡猾でもない。頑固者で、話しぶりも表情もいかにもしつかり者らしいが、誰も彼に敬服してゐなかつた。彼は祖父を自分の家へ迎へに來たのである。楊老臘が今晚俸をつれて彼の家へ謝罪に來ることになつてゐたからである。ついでに彼は自分の意見をのべた。

『あいつを役所へ連れて行きやいいんだ。謝罪だけさせるなんて。謝罪で事がすむなら、俺だつて女をなぜたくなるわさ』
祖母はただちに彼を非難した。

『お前どこの家の者だと思ふんだい。そんな物の言ひ方をして！』

をぢは顔を赤くして抗辯した。

『あいつがあんな目茶なふるまひをして、たかが謝罪ですま

せるなんて、俺はテコでも承知するもんか！』

祖母は彼をなぐさめた。

『あの男は何もわかりやしないんだよ。あれと一緒に本氣になつてどうするのさ。』人を許してやるのは馬鹿ぢやない。馬鹿が人を許せないんだ』と言ふぢやないか。わしの言ふことをきいて許しておやり』

五番目のをぢはますます憤慨した。

『許すつて……あいつを許したら他の者が俺のこと承知しないさ。韓の家の者がまづ第一俺を許すまい……今晚女房の兄弟二人は刀をぶちこんで乗り込んでくるぞ』

祖父は顔色をかへて彼をさへぎつた。

『あの二人の舅はゴロつきだで、あいつらにあればさせるなよう。自分たちは殺すとすぐ逃げる、屍はお前と一緒に残される。どう一體後始末をするのかい、人殺しの裁判で何年もながびくのはよくあるこつだぞ』曾祖母も大聲で叱りつけた。

『お前だつて子孫のためにちつた功德を積みなよ。人殺しは三代の怨みといふ、報ひが報ひにつづく、人の命をとるなんてなまやさひいこつちやないよ……あいつがしでかした事は、佛様のお罰にまかせなよ』

をぢは陰鬱に笑つた。

『仕方がないよ。女房の兄弟ときたら、一度腹を立てたら止めやうがないんだから』

曾祖母はすぐさま彼をさとした。

『そこはハツキリさせなきやいけないよ。韓家の娘はお前のと

ここに嫁入りした以上、お前の家の者だよ。お前しつかり話をつけないけりや』

をぢは不満をあらはした。

『しつかり話をつけるよ！話をつけければ楊冬生の奴を牢屋へぶつこませるだけの話よ』そこで祖母は言った。

『今日のところはまあお父さんがどうなさるか見た上で、お前もさうするんだね』

『お父さんの耳はあてにならんから、ひとの話は聴けつこない』

五番目のをぢはかう言ひをはると、鬱々と樂しまずして立去った。

曾祖母も祖母も祖父にすすめてゐた。

『今晚は是非とも行つて、騒ぎを大きくせぬようしなけりやのう』

祖父の方は髭をひねつて思案してゐた。

『五郎の言ひ方は少しひどすぎるさ。だがただ謝罪させるだけぢやどうも不充分だな』

『もうやめやめ。やつと一人歸つたら、今度はあんたの番だね』と祖母はきめつけた。

祖父はあらたまつた顔つきで言った。

『お前は一を知つて二を知らんのだ。わしの考へは楊冬生一人をこらしめるんぢやない。他の奴を警戒するのが大切なんだ。こんな醜事件は二度と起させちやならんのだ』

『そんならどんな罰をするのさ。……首でも斬るんだらう』

祖父は沈吟してゐた。

『それにも及ぶまいが。一郎が歸つて來たらみんなどうまく考へよう』

この日は日曜で、父は町へ出てゐた。父は歸るとすぐ祖父に言った。

『こりや大きな騒動になりましたよ。街の人はみんな知つてゐる。ただの謝罪ぢや駄目だらう。午前、二番目のおぢいさんの所へ行つた時はその意見がもつともだと思つたが、街へ行つてみて、あんまり我慢しすぎる氣がした』

祖父はうなづきかねる様子で父にたづねた。

『謝罪にしないと、どうやる氣かね』

父はやや興奮してゐた。

『街の人の話によると、くるぶしの骨を打ち碎ひて一生片輪にする、これも一案だとさ』

祖母はびつくりして叫んだ。

『それぢや殺すよりひどいよ。お前、一生片輪にして誰が養ふつもりだい。楊老臘老夫婦もあの男にたよつて暮してるんだよ』

曾祖母は數珠をかけた手を振つて父をいませめた。

『子供のために功德を積んどきなよ。お前も三十だよ。男三十は修業の時よ、物ごと萬事やりすぎるな、と言ふぢやないか』

父は曾祖母たちを見まはしてから話をつづけた。

『もう一つやり方があるが、これは輕すぎるんでね。やつて』

も毛筋一本傷つけないんだから』

祖母はもうがまんできなくなつた。

『もし止むを得なけりや、そのやり方でやらせなさい。その前のやり方は決して口にするんぢやないよ。腹たちまぎれに何をやり出すかわかんないからね』

祖父は手を振つた。

『邪魔しちやいかん。終りまで喋らせろ』父は笑ひを忍んで言つた。

『こいつは別にひどいことはないんだが、我慢できにくいんだよ。女の布靴を額にむすびつけて、街をひきまはす、そして頭の後で爆竹をならして大勢の衆にみせるんだとさ』

『そりやいいな』と祖父はうなづいた。祖母はたまらないといふ様子だつた。『そんなことをされたら人間づきあひが出来なくなるよ』

祖父はキツとなつて厳めしく言つた。

『自分がわるいのさ。自分で先に人間らしくないことをしてかすから』

父も祖父に同意見だつた。

『さう、あの男今でも外を歩きたがらないよ。一昨日俺はあの男がそんなことしたと知らないのに、向ふで顔を眞赤にして下むいてかけてつた。變だと思つたんだよ、いつも會へばかならず挨拶するのに』

曾祖母はすかさず言つた。

『なら、それで充分だよ、纏足の靴を載せる必要なんかない

ぢやないか。ねえお前さんたち、これが佛様の罰された證據さ、だから自分の心が苦しいのさ』

父は微笑した。

『全く楊冬生が正直だから自分の失敗をばづかしがるんだ。街のゴロつきを見なさいよ。ひとの女をからかつて、何處へ行つても鐘太鼓大得意で腕前をえはつてゐるから』

祖母はあはてて、口を挿んだ。

『楊冬生は小さいときから、つまらぬ事しかす男ぢやなかつたよ。マア怒りつけるだけでいいよ。お前の言ふ二つのやり方は街のゴロつきにくれておやり』

曾祖母は數珠をつまぐりながら嘆息した。

『立派な若いものがヒヨイと眼がくらむなんて、きつと魔がさしたんだねえ』

『そりや何とも言へん』

祖父は髭をいぢりながら沈吟してゐた。

その晩、祖父は闇の夜路はつらいので、父一人が代表として出かけた。私は騒ぎを見に行きたかつたが、父はそれを許さず、『おちいさんが怒るから』と言つた。しかたなく家に残つたが床に横たはつても永いことねむりつけなかつた。窓の外では蜜柑や橘の樹々が白い花々を開き夜しづかにして嗅ぐと、晝間よりはるかによく匂ふかのやうであつた。私は考へれば考へる程不思議でならなかつた。何故一本の手をそんなになぜてはならぬのか。大人たちがみんなこのことのため大騒ぎするほど、五番目のをばさんの手は普通と變つてゐるのか。私はおぼえてゐ

るお母さんもなぜたし、私もなぜた。何故そのときをばさんは怒らず、ほかの人も注意しなかつたのか。つまり間違ひは楊冬生の手が他人の手をなせていけないことに在るにちがひない。では楊冬生は私の手をなせたではないか。去年の冬私一人學校へ行く途中、悪い犬が向ふから噛みかかつて来るのを見て、逃げかへる時、私はバタリと倒れて兩の掌を痛めた。その時楊冬生は畑の畦を作つてゐたが、かけ寄つて私を助け起し、私の掌をなせて『大丈夫、大丈夫、すぐ良くなるよ』と言つた。

私は家へ歸つてこの事を母に話すと、母も非常に喜んだ。あの日彼女がクリークで洗濯してゐて楊冬生の母親に會つたが、この話になると『冬生さんに厄介かけたよなあ、おかげで助かつたよう』と感謝したものだ。

何故、彼が私の手をなせても皆の衆は非難せず、母が感謝の意まであらはしたのに、ひとたびをばさんの手をなざるとこのやうな大騒ぎになるのか。私の小さい胸にはどうしても腑におちなかつた。ただ大人のすることはわけのわからぬおかしな物と感じた。このことを母に話すと母は笑つて言つた。

『子供はそんなこときくもんぢやない。お休み、明日は早く學校へ行かなきゃ』

しかし私がどうして睡ることが出来る。蜜柑や橘の花の香を嗅ぎつづけるばかり。まもなくして、ほととぎすが遠い田野で啼くのがきこえた。そして家近い虫の音、蛙の聲が音樂會でもやるやうに特別賑やかであつた。今までは床に入るとすぐ睡つたのが、この晩はじめて夜の楽しさを覺えた。そして次第に、

手が手をなせた重大事件も忘れてしまつた。

夜ふけて父が歸つてきた。外で祖母たちと話すのがきこえた。

『あの男を苦しめはしなかつたかい』と祖母はたづねた。

『路々俺は、少し嚴重にやらないと他の家の小作人までのさばり出すと考へてたんだが。向ふへ着いて楊ぢいさん夫婦が涙をポタポタ落して叩頭するのを見ると、小さい頃、楊老臘が俺をおぶつてあやしなから縣の學校へ通ふのに骨折つたことを想ひ出して、氣が弱くなつたよ』

祖母は嬉しげな聲で口を挿んだ。

『さうだよ。人間は相手の良いところを見てやるもんだよ』

父は話をつづけた。

『韓家の兩兄弟は刀を引き抜いて楊冬生に穴をあけようとしたんだが、俺が永いことなだめてやつと止めさせた。五郎の方がかへつてめんだうで、なだめ終つてもう良いと思つてゐたら、又カツとなつてわけもわからず相手に横手打ちをくらはし、それでも足りずに背中を拳骨でなぐりつけたよ。韓家の長男はサツパリした男で、楊冬生に叩頭させただけです。ただ次男の方がきかぬ奴で、何とか事を面白くしようと、女の靴を頭に載せさせた上、五郎の嫁の下穿きで帽子をこしらへて奴の頭に載せさせたもんだ』

祖母はたまらぬといふ調子で嘆息した。母は燈火の下で布靴の底を縫つてゐたが、やはりいかにも厭やらしいやうに罵つた。

父はまた話しつづけた。

『それでも足りずに、嫁さんにその場でその下穿きに小便さ

せたよ。嫁さんもやつたもんで、本當にそこへやらかしてクシヨクシヨのを奴の頭に載せたよ』

『韓家の娘も出しやばり過ぎるよ。いつもはそんなにひどい事もないのに』と祖母は非難した。

母も首を振つて、沈吟しながら言つた。

『多分腹たちまぎれだらうさ』

祖父も外で満足したらしい聲でゆつくり言つた。

『少しやり過ぎたことはやり過ぎたな』

父は慨嘆して言つた。

『もちろんやり過ぎたさ。小便の下穿きをかぶせた話はきいたことがないもの。俺は楊老臘たちと一緒に歸つて來た。みんな二番目のおぢいさんの家ではよう泣かなかつたが、門を出たとたんに泣き出してさ、何と言つてなだめたものやらわからんし、なだめてとまるものでもなし。なにしろ老人夫婦のつらがり様、悲しみ様ときたら』

祖母も泣き出しさうな聲で言つた。

『そりやお前、あの男の一生を臺なしにしたんだもの、親として悲しがらずにゐられるかよ』父親は話をつづけた。

『楊冬生はなほのことつらくて、石橋のところまで來ると、楊老臘がすばやく防がなかつたら一緒に跳びこむところだつたよ。楊ばあさんは泣いてひきとめて、お前が死ぬなら私も水にはまつて死ぬと言ふし。楊老臘は、馬鹿、どうしてそんなに死にたがるかと怒るし、楊冬生はみんなに抱きとめられ、跳びこめぬとなると『俺は自分が馬鹿だつたのがくやしいから死にた

いんだ』と嘆息したよ。これであの男がひとの手などなざるんぢやなかつたと後悔してるのがよくわかる。途中まで來ると、あの男又足をとめて泣き出した。『俺を死なせてくれろ。これから先、恥さらして生きずにすむようにな』つて言ふんだ。はじめは俺は奴を憎いと思つてたのに、その時にやつぱり可哀さうになつてな。『家に居るのが具合悪かつたら遠くへ出稼ぎに行つたらよからう』とすすめたよ。楊老臘も、金借りて商賣をやれ、省城はひろいから知る者はありやしないと奴をなだめていたつけ』

祖母は嘆息した。

『人は馬鹿にはなれないねえ』

外はすこし靜かになつたが、父は不意にたづねた。

『楊冬生の奴今年いくつかな』

『多分お前と同じくらい、もうやはり三十だらうか。あれの母親がお前を取り上げに來てくれた時に、腹が痛み出したんだからな』と祖母は言つた。

父はやや感慨ぶかく言つた。

『そりや楊老臘夫婦も悪いさ。たとへどんな女でもいい、から、嫁をむかへてやらにや。三十にもなつて獨身ぢや馬鹿にもなるだらうぢやないか、ねえ』

『何も楊老臘が悪いんぢやないよ。お前にやあの親達の苦勞がわからないのさ。親達は息子よりあはてて早くから嫁を心かけて、何年も方々仲人を頼んで廻つたもんだが……困つたもんだ、飯も満足に食べられぬことをみんな知り切つてゐるから、誰

も娘を嫁にやり手がないのさ』と祖母は嘆息した。

父はアーアーと言つたなり口をつぐんだ。

祖父は部屋へ行かうとしながら『こりや何ともいへない』と言ひ、『お前ら早く灯りを消すんだよ、油が高いからな』と父にいひつけた。

父は部屋に入つて着物を脱ぐと、すぐ灯りを吹き消して寐床にもぐつた。暗の中で母の聲がきこえた。

『五郎の嫁もあんまりだよ。下穿きを頭にのせて小便なぞかけてどうするのかね』

父も不満らしい聲で答へた。

『下穿きに小便かけるところか！刀を持たせりや、今晚など人殺しもやりかねなかつたぞ、全くの話だ』

しばらくして母は嘆息した。

『人は見かけによらぬもんだねえ』

多分父と母は長いこと話し込んでゐたのだらう、私も次第に睡りについた。

次の朝早く起きると、またよい天気で、空は美しく藍色に晴れ、眞白な雲が小さな房のやうにゆつくり移り動いてゐた。近くの家の鳩が呼子笛を足につけ、二三羽づつ頭上の空に輪をえがき、翼から金色の陽の光が反射してゐた。家の裏の竹林の中では小鳥たちが競ふやうに歌ひ、簷下につま立ちして眺めても鳥影は見えず、只一面の竹の葉樹の葉であつた。蜜柑橘の花は白い小さな星の群のやうに、黒緑色の葉叢の中で酔ふやうな香を漂はせてゐた。もし朝食の際、父たちが昨夜の事を話し出さ

なかつたら楊冬生の事は忘れはてたところだ。

食事をすませて學校へ行く途中、楊冬生の家の前にさしかかると私は足をとめた。楊冬生がどうしたか見たかつたのである。彼の家の垣根の門はいつも早くから開かれ、紅い鶏冠の雄鶏が、黄色や黒の雌鳥をつれて出て來ては、落ちついて餌を啄んでゐて、物音をきくと一齋に逃げ込んだりしたそれが今日は閉まつたままで、ひどく凄然たる感じだつた。垣根に爬ひ上つた野バラは白い花をゆたかにつけ、それが間の悪い時にめぐりあはせたといふやうに、ひとり淋しく開いてゐた。まもなく竹垣の扉が開いて、楊老臘が出て來た。顔はひどく痩せ、眼がくぼみ、私も目に入らず、花も眺めず、後ろ手に扉をひきよせると、眞すぐ前をみつめたまま、のろのろと田の方へ歩いて行つた。

學校に遅刻するのが心配で楊冬生の出て來るのを見ずにそこを立去つた。河にそひ、楊柳のやはらかな枝が私の頭や肩にさはり、米粒大の花棉はすでに一つ二つと風に乗つて飛びはじめてゐた。菜の花は小さな實を結び、ただてつぺんの黄色い花がまだ落ちきつてゐなかつた。蜜蜂は時機を失するのおそれるかのやうに、日に照らされた残りの花の上をいそがしげに飛びかつ唸つてゐた。桃も李もとつくに花を散らしてゐた。しかし田の小路の野花は紅も黄も一面に小さな花をつけてゐた。頭上の樹の枝には時々、對の鳥がゐて、人が來ると驚いて飛び去つた。樹の葉、草の葉すべて青々として、軽い笑ひをふくむかのやうに、麗しい日光をうかべてゐた。この美しい天気、この美しい田野は、學校の勉強を厭にさせ、靴をはくのもめんだうに

させた。ただただ足の裏をむき出しにして、やはらかい草の路を、柳の綿花をつかまへて遊び歩きたかつた。

まもなく父が後から来て大聲で叱りつけた。

『なんて馬鹿野郎だ！みんな勉強に行つてゐるのに外で遊び廻つてゐるなんて』

前には、父や母が馬鹿と罵つても、私はたいして意に介しなかつた。ところが昨夜、楊老臘が伴を馬鹿と罵り、楊冬生も自分の馬鹿をくやしがつた話をきいてから、馬鹿といふ二字がこはくなつたのである。今この二字が私の上に加へられるのを聽いては、たまらない氣持だつた。それから又、少し前に鉢植えの蘭の花が開いたのを見て、ツイがまん出来ないで一つ取つた時、母がかけ寄つておそろしい勢で『どうしてかう馬鹿なんだらう、おぢいさんが取つちやいけないと言ふのに取るなんて』と言つたことを想ひ出した。

私はその時、摘んだ花をまたひつつけられないのがうらめしかつたが、そんなことがどうしてできようか。悔いても及ばぬことなのである。私は歩きながら考へた。人間の身體にはおそろしい物がかくされてゐる。それは私の探し出せぬ場所にかくれ、いつか知らぬまに人間を馬鹿にしてしまふのだ。しかも皆は私に手つだつてこの恐ろしい物をつかまへようとはせず、かへつて私を叱りつける。これは主人が盜賊に入られた時その賊をつかまへるのを助けずに、かへつて主人を非難するやうなものだ。私は馬鹿と罵られ、馬鹿のため非難されるのが哀しくてならない。

學校からほど遠からぬ所まで來ると、向ふの路を楊老臘が曲つて來るのが見えた。その前を老人が一人歩いてゐた。この近所の病氣を見てまはる醫者で蘭先生と呼ばれてゐた。

次の日曜、丁度五番目のをばさんが家へ遊びに來た。象牙色の顔は少し瘦せて見えた。前よりもつときびしい顔つきで、よく微笑した面影はなかつた。おそらく、彼女が楊冬生の横面をなぐつたこと、楊冬生に小便の下穿きをかぶせたことが、私を彼女に近づきがたくしたのであらうことに騒動を惹き起した手がこわかつた。私の母は彼女としばらく世間話をしてから、小聲でたづねた。

『小便の下穿きを頭にかぶせたといふが本當なの。』
をばさんはすぐ顔を赤らめて、つらさうに言つた。

『全く仕方なくてやつたのよ。私、はじめは平手打ちしただけで充分だと言つただけだね、陰で私がシヤンとしてゐないから、相手が悪心を起したんだなんて、悪口言ふ人がゐてね。ねえ、全く無實の罪ぢやないのねえさん、あなた私のことよく知つてゐるけど、私そんなにだらしないくて？私誓つて言ふけどひととふざけたことなぞありやしないわ』

彼女はここまで話すと眼じりをうるませた。母は彼女の手をとつて慰めた。

『おせっかい屋の言ふことなんか、かまひつけなさんな』
をばさんは怒つてゐた。

『あんただつてこんな目に遭つたら、かまはずにゐられはしなくてよ。どうして人間てかう恐ろしいのかしら。ありもしな

い事をみんなで押しつけて来るのよ。想ひ出すと夜も睡れないわ。はじめのうちこそコッソリ知らせてくれるとビックリして跳び上つたもんだけど、後でくはしく聴いてみると、面と向つてはいはないけど、裏に一物あるのよ。それから相手か眉毛一本動かしてもすぐわかるやうになつたね』

母は彼女の手を握つて氣の毒さうな様子を示し、輕くいましめるやうに言つた。

『そんな、そんな、だめよ、そんな風にしてたら病氣になつてしまふよ』

をばさんはくやしさうだつた。

『十日でも半月でも病氣になりたいわ。こんなにしてるのがまんがならない。ねえさん、考へてごらんない。楊冬生に私が腹を立てたと思つて。あの晩のこと想ひ出すと今でもこわいわ。もつとひどいことだつて起りかねなかつたのよ』

母は一生懸命彼女をなぐさめた。

『いいのよ。過ぎ去つたことは過ぎ去つたこと、もう考へるのやめた方がいいわ』

をばさんは首をふつてめんだう臭さうだつた。

『私だつてさう考へたかつたのよ。みんなみんなきれいなサツパリ忘れちまふ。だけど私が忘れたつて、ひとが忘れないぢやないの！』

母は一寸顔を赤くした。

『さうさう。わたしがつかりお喋りしたの御免ね、言はずにゐられなかつたんだもの』

をばさんはすぐさま母の手を握り、すまなさうな様子をみせた。

『ねえさん、さうぢやないのよ。あんたが言ふの問題ぢやないの。あんたの氣持よくわかるの。他のひとたちが口に出さないのがイヤなのよ。意地悪さうな眼つきでヂロリと見るの。言はれるより、もつとつらいわ。ねえ私だつて言ひたいのはやまやまなのよ』

母はあはててをばさんの手を握り、氣の毒でたまらぬ様子、むしろ怨みがましく言つた。

『どうして又そんなこと想ひ出すの。私に心配するなと言ふけど、あんたの方がもつと氣をつかつてるのよ。だめだめそんなこと考へちや。疑心暗鬼よ。だつてあんたのことほめてるのを聴いたんだもの』

をばさんはすつかり嬉しがつて息せき切つて母にきいた。

『何を言つてるのよ。誰が言ふのよ』母はをばさんの肩を見て、埃がついてるので指ではじいてから言つた。

『私がクリークに洗濯に行くとき、隣の女が言ふのよ、あんたの弟の嫁さんも大變だねえ、あんなひとこそ貞女の鏡だわつて』

をばさんはもちろんひどく嬉しがつた。だけどおさへるやうにして言つた。

『でもあなたの前でさう言つたつて、陰で何を言つてるか。だつてあなたと私の仲の良いことよく知つてるもの、悪口言ふはづないわ』

母は不承知らしい。

『それが氣をつかひ過ぎるのよ。誓つて言ふわ。そのひとが私に言つた時、一寸も氣嫌とるところなかつたわ、全く誠心からよ見てわかるわ』

をばさんは何物かに觸れたやうに、顔面をピクピクさせ、氣をしづめながら小聲になつた。

『こんな話きいたのよ。作男だから良かったけど、貴族の若様だつたらどうだらう、つて。これでも腹が立たない？ねえさん』

母もパツと顔に血がのぼつた。

『そんな馬鹿な話！その場で横面はりとはしやいいのに』

おばさんは唇を噛んで、怒りのためにボーツとなつてゐた。

『しゃくだわ、陰で言ふんだもの！』

母も不平だつた。

『何處の誰なの？』

おばさんはもう顔を眞青にしてゐた。

『誰だかわかつたら、髪の毛むしりとつてやるわ』

母は首を振つて慰めるばかりだつた。

『ほんとに根も葉もないこと。聴きなさんな。ねえ。氣を大

きくもつて、勝手に喋らしときなさいよ』

おばさんは無理に氣をしづめた。

『そりや私だつて氣を大きく持つわよ。それぢやなけりや、首つゝてるわ、とつくに』

母はあはて、おばさんの手を握つた。あたかもその手がおば

さんを苦しめるかのやうに。

『もう言ひなさんな。ほかの話しようよ。ねえ、私のこの靴すばらしくない、おばあさんが縣城から型を取つて來たのよ。今とても流行つてるんだつてさ』

おばさんは母のわたす新しい靴を手にとつて、一寸見ると、突然その靴で母の膝をポンと叩いた。怒つてゐるらしい。

『若様どころか、天子様だつて何なのよ！金持が好きなら何もこんな家へ嫁に來ることないぢやないの。どんな身なりをしてゐようが、人間がよければいいぢやないの。仕事をよくやるかどうかよ。昔から牛飼ひだつて皇帝になれるのよ。ねえ、乞食だつて金が乞食にさしたのよ。金に目がくらむ目なんか！』

母は靴をうけとつて側へ置いてから言つた。

『きつと、わざとあんたを怒らせようとしてるんだよ。怒れば計略にかかるんだよ、あんたをかばふひとが好きだと言へば、

それでいいのよ一日中ひとの話きいてたら命がもたないわ』

をばさんは唇を噛んで、ヂツとこらへてからゆつくり言つた。

『その点はゆつくりさうするわ。ただどうしても我慢ならぬのは、毎日顔つき會はせてるひとが、疑ひぶかい眼つきで見ることよ』

母は不安げにきいた。

『私のお母さん？』

おばさんは顔色がかはつてゐた。

『あんたの弟の五郎がよ！』

母はグイと首を振つた。

『あのひとさういふたちだ。だけど他の奴より利巧なんだけどねえ』

おばさん^{ママ}はたまらなくなつた。

『本當に利巧ならいゝのよ。變なところばかり利巧なんだもの。だから腹が立つのよ。いくら言つたつて聴きやしない。自分だけが正しいと思ひ込んでるんだもの』

おばさん^{ママ}はそれから長い^{ママ}ためいきをついた。

『それもこれも、私が運が悪いのね』

私は彼女の眼がまたうるみ、キラキラ光る涙の珠があふれ出るのを見た。母は又もやおばさん^{ママ}の手の甲をなぜさすつた。あたかもその手が彼女を苦しめるかのやうに。（一九四三年、五月一日、桂林）

武田 淳 譯

（以下次号）